よく働き、歓喜し、悲しんで
——「村の鍛冶屋」とアメリカの神話創成——

澤　入　要　仁

はじめに

バスター・キートンの映画に『鍛冶屋』(1922) という作品がある。鍛冶屋に扮するキートンがドタバタを繰りひろげる喜劇だが、その幕あけにロングフェローの詩「村の鍛冶屋」(執筆1839) の一節が使われていた。「枝の張った栗の木のしたに／村の鍛冶屋の店がある」と、まずは冒頭の句が映される。すると画面には、背丈が異常に高く、最上部にわずかしか枝葉がない木のしたに、ぽつねんと立っている鍛冶屋が登場する。詩に描かれた木の姿と画面のそれとの相違がおもしろいだけでなく、「鍛冶屋の店がある」の詩句に動詞 stand が使われていたのを受けて、映画の主人公が文字どおり立っているところもおかしい。

つづけて「隆々とした腕の筋肉は／鉄のたがにおとらず力づよい」という詩句が現れる。キートンも片肘を曲げて上腕の筋肉を異常に隆起させる。しかしそれは袖のなかに風船をしのばせていたからであって、風船が破裂するや、貧弱な細腕が露呈してしまう。さらに、「学校帰りの子供たちが／開いた戸口のなかをのぞきこむ」という句が引用されるが、映像では鍛冶場をのぞく子供たちが追い払われてしまう。映画はこのように始まり、顧客の白馬を汚したり、顧客の高級車を破壊したりする珍騒動を繰りひろげる。日夜仕事に精を出し、安息日に教会に通う、ロングフェローのうたった「村の鍛冶屋」とは大違いだ。

キートンが映画でパロディ化した詩「村の鍛冶屋」は、ベストセラー詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの詩のなかでももっともよく知られた詩のひとつである。日々の精励を説いた詩として、同じく人生の奮起をたたえた「人生の歌」(執筆1838) や「もっと高く」(1841) などの代表作とともに愛された。また、アメリカ人に共有されるキャラクターを創造した詩として、『エヴァンジェリン』(1847) や『ハイアワサの歌』(1855) などの物語詩と並称された。このようなふたつの大きな特徴を「村の鍛冶屋」はそなえていた。その知名度もいわば当然だった。[1]

キートンはその知名度を逆手にとった。知名度があったから、キートン一流の鍛冶屋がおのずと対置され、笑いを誘うのである。逆にいえば、キートンに取りあげられるほど、すなわち、詩と映

---

[1] 「村の鍛冶屋」は日本でもよく受けいれられた。川本皓嗣はとくに唱歌「村の鍛冶屋」と比較していて興味深い。川本皓嗣「村の鍛冶屋」の生きがい——詩人ロングフェローと小学唱歌」『東京大学公開講座59アメリカと日本』(東京大学出版会、平成6年)、241-76頁。

画という形式の違いを越えてパロディが作られるほど、「村の鍛冶屋」の説くメッセージが普及し、その人物像がアメリカ文化のなかで固定化していたといえるだろう。このように「村の鍛冶屋」は、それを受容していたアメリカ文化に関しても、たいそう興味深い研究テーマを与えてくれる。

けれども、キートンが利用したような「村の鍛冶屋」のメッセージや人物像は、本当に正しいものだったのであろうか。映画は、「村の鍛冶屋」には刻苦勉励や質実剛健が描かれているという前提のうえに作られていたが、それがこの詩の真のテーマなのであろうか。キートンだけではない。「村の鍛冶屋」はこれまでしばしばアメリカ人の勤勉さを象徴する詩として言及されてきた。アメリカ人の勤労精神を論じるさい、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』などともに引用されてきた。しかし、そのように利用する前に、もう一度この詩の内容を検討しておく必要はないだろうか。

そこで本稿では「村の鍛冶屋」をいわば過去から読みなおすことによって再検討することを試みたい。すなわち「村の鍛冶屋」以前の神話・伝説や文学作品と対比させながら丁寧に読むことによって、この詩の新しさや特徴を浮き彫りにしたい。そうすることによって、この詩がどのような伝統のもとで書かれ、どのようにそれを逸脱しているのかが明らかになると考えられるからだ。背景と対比させることによって、ロングフェローの鍛冶屋像の輪郭がはっきりと浮かびあがると思われるからだ。

もちろん、ロングフェローの「村の鍛冶屋」はある程度の事実にもとづいて書かれたこともたしかである。詩人の住居の近くにデクスター・プラットという鍛冶屋が店を構えていた。その店の外には大きな栗の木もあった。また、詩人の念頭には鍛冶屋であった初代スティーヴン・ロングフェロー（1685-1764）の姿も想像されていた。詩人の曾祖父の祖父に当たる先祖である。[2] このような背景があるので、「村の鍛冶屋」は近隣の鍛冶屋と先祖の鍛冶屋を重ねあわせた描写であると考えられやすい。

けれども、「村の鍛冶屋」をいわば過去から読んでみると、詩人の野心がもっと大きかったことがわかる。というのは、そのように読むことによって、この詩がヨーロッパの叙事詩や伝説とは対照的な特徴にみちていることが明らかになるからだ。自由と信仰を重んじる新しい社会アメリカにふさわしい特徴にみちていることが確かになるからだ。その結果、この詩はヨーロッパと違って叙事詩や伝説をもたないアメリカに作られた新しい神話のように見えてくる。ある特定の鍛冶屋ではなく、詩人の考えるアメリカ人の原初的な姿を描いた神話に見えてくる。本稿は、「村の鍛冶屋」を過去から読

---

2 Samuel Longfellow, *Life of Henry Wadsworth Longfellow* in *The Works of Henry Wadsworth Longfellow*, vol.12, ed. Samuel Longfellow（1891; New York: AMS Press, 1966), p. 375. なお、この栗の木は道路の拡張にともない1876年に切りとられたが、1879年、詩人の72歳の誕生日を記念して、その木から作られた椅子が詩人に贈られた。この椅子について詩人がうたった詩が「私の肘かけ椅子から」（1879）である。また「村の鍛冶屋」の材源として、1831年にイギリスで出版された *The Village Blacksmith* という、宣教師の伝記も関係しているといわれている。Joseph Masheck, "Professor Longfellow and the Blacksmith," *Annals of Scholarship* 10（1993）: pp. 345-61.

みなおすことによって、その神話性と神話としての特徴を明らかにしようとするものである。

鍛冶屋の姿

Under a spreading chestnut-tree	枝の張った栗の木のしたに
The village smithy stands;	村の鍛冶屋の店がある。
The smith, a mighty man is he,	この鍛冶屋、力あふれる男で
With large and sinewy hands;	大きい頑丈な手をしている。
And the muscles of his brawny arms	隆々とした腕の筋肉は
Are strong as iron bands. [3]	鉄のたがにおとらず力づよい。

それでは「村の鍛冶屋」を読んでみよう。冒頭に明らかになるのは、ロングフェローの鍛冶屋が栗の木のしたに住んでいることである。この変哲もない素朴な舞台設定がじつはおもしろい。というのは、多くの伝説で鍛冶屋は地下や岩穴に暮らしていたからだ。

たとえばロングフェローが愛読したウォルター・スコットに『ケニルワースの城』(1821) という歴史小説がある。このなかに、ゲルマン・北欧伝説の鍛冶屋ヴィーラント (ウェイランド) が登場するのだが、彼は茂みで入口をたくみに隠した岩穴に隠れ住んでいた。[4] ゲルマン神話によれば、そのヴィーラントが弟子入りした小人の鍛冶師たちも、岩穴のなかで生活をしていた。[5] ワーグナーのオペラ『ニーベルングの指環』のなかでも、ジークフリートを育ててきた鍛冶屋ミーメは洞窟に暮らしている。[6] いやそもそも、それらに影響を与えたといわれる、ギリシャ神話の火と鍛冶の神ヘパイストス (ヒフェスタス) やローマ神話の火と鍛冶の神ウルカヌス (ヴァルカン)、そしてその手下の鍛冶師キュクロプス (サイクロプス) たちもエトナ火山の地下に住んでいた。

しかも栗の木というところがアメリカらしくていい。なぜなら、この栗の木はアメリカ栗と思われるからだ。アメリカ栗は幹の直径1メートル、高さ30メートルにも達する大型の木で、最北東のメイン州から深南部のルイジアナ州に至るまで、よく見られた種類であった。ジョージア州やアラバマ州などでは、家具などに使う硬材はその四分の一以上がアメリカ栗から作られたという。その姿といい、その有用性といい、アメリカを代表する木のひとつであった。アメリカの神話の舞台を飾る大道具にふさわしい。しかも、栗の木は堅い木材になるので、堅さや耐久性の象徴であったという。[7] つまり、

3　以下、ロングフェローの詩はキャビネット版による。*The Complet Poetical Works of henry Wadsworth Longfellow*, Cabinet Edition (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1899), p. 17.

4　Sir Walter Scott, *Kenilworth* (Oxford: Oxford University Press, 1912), p. 137.

5　ライナー・テッツナー著、手嶋竹司訳『ゲルマン神話』上巻、青土社、平成10年、50頁、および同、下巻、青土社、平成10年、314頁。

6　リヒャルト・ワーグナー『ジークフリート』(舞台祝祭劇『ニーベルングの指環』第二日) 三光長治他訳、白水社、平成6年、7頁。

7　Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, revised (Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1976), p. 96.

鍛冶屋の作る鉄製品、あるいは、鍛冶屋の頑丈な肉体を象徴する樹木としてもぴったりだ。

最後の行の iron bands は、直接には鉄のたがを意味する。酒樽や桶を結わえている金属のベルトを考えればいい。筋肉の強さをたとえるために取りあげられたものである。しかし、腕のような肉体の一部と同時に iron band が現れると、首に巻かれた iron band や、手足に巻かれた iron band を思いおこさずにいられない。これらは囚人や奴隷を拘束するために使われる首輪であり、手枷(てかせ)、足枷(あしかせ)である。じっさい、iron-bind という動詞もあって、iron band で拘束するという意味に使われる。

つまり筋肉の強さをたとえるために iron band が使われているのは、単に鉄のたがが堅いからではない。あるいは hands と韻をあわせるために選ばれたのではない。それだけではなく、この鍛冶屋を拘束したり隷属させたりすることは不可能であることを示すために選ばれたのだ。村の鍛冶屋は自由で独立した人間であって、たがで縛り付けようとしても、それを引き裂いてしまうのである。

ここまでくれば、先にあげた鍛冶師ヴィーラントの伝承を思いださずにいられない。アイスランドのエッダでは、ヴィーラント（ヴェルンド）は王ニーズスに捕らえられ、「手は固く縛り上げられ、足には足枷がかけられ」た。[8] ゲルマン神話では、眠っているヴィーラントが「腕と足の鎖の重みで」目が醒める。[9] そしていずれの伝承でも、孤島に幽閉され、隷属状態のなかで王のための鍛冶仕事を強制された。

すなわちロングフェローの鍛冶屋は、このヴィーラントのように捕りおさえることもできないし、ヴィーラントのように隷属しているのでもない。自由の国アメリカの市民らしく、独立した身分で自由な生活を送っている。拘束に抵抗し、隷属を拒否する。村の鍛冶屋のもつ、ヨーロッパの伝説とは対照的な大きな特徴のひとつである。

なお、ロングフェローが北欧やゲルマンの伝説を「村の鍛冶屋」に利用したことを示す直接の証拠はないが、北欧やゲルマンの文化に造詣が深かったことは示しておきたい。ゲルマンに関しては、ロングフェローによるドイツ詩の訳業のなかに、たとえば、ドイツ中世文学研究や物語詩『若きジークフリート』で知られたルトヴィック・ウーラントの詩がいくつか含められていた。さらに「中世におけるドイツ文学史大要」（1841）という研究もあった。もちろん留学体験もある。

北欧文学に関しては、ロングフェローの関心はいっそう大きかった。スウェーデンやデンマークにも留学経験があったし、訳業としてはスウェーデンの詩人エサイアス・テグネールの代表作でアイスランドの神話的英雄の物語詩『フリショフのサガ』を1837年に一部翻訳していた。また物語詩『路傍の宿の物語』（1863）には、11世紀のノルウェー王の伝説にもとづいた「オラーフ王のサガ」を書いている。[10] このようにゲルマン神話にせよ、北欧伝説にせよ、ロングフェローは愛好家であるだけでなく、専門家としての知識ももっていた。ゲルマンや北欧の伝説における鍛冶屋の伝承も

8　谷口幸男訳『エッダ』新潮社、昭和48年、94頁。

9　前掲、『ゲルマン神話』下巻、318頁。

10　北欧文化との関係に関しては、Andrew Hilen, *Longfellow and Scandinavia*（1947; Hamden, CT: Archon Books, 1970）参照。

知っていたと考えるべきであろう。

His hair is crisp, and black, and long,	ちぢれた、黒い長い髪をして、
His face is like the tan;	顔はなめし革のような色。
His brow is wet with honest sweat,	額には正直の汗がにじみ
He earns whate'er he can,	どんな仕事もわずかの稼ぎで引きうけ、
And looks the whole world in the face,	世間の顔をまっすぐ見すえる。
For he owes not any man.	誰にも借りはないのだから。

第二連も非常に素朴だ。文のシンタックスが単純で、しかもその単純な構文が繰り返されている。けれども注目すべきは、この鍛冶屋の容姿である。髪が縮れていて長く、しかも黒い。顔の色はなめし革の色、すなわち黄褐色である。白人のアメリカ人の典型的容姿ではない。この容姿はどのようなイメージなのだろうか。

まず考えなければならないことは、彼が鉄鍛冶（ブラックスミス）であることだ。鉄鍛冶は、その金属が黒いだけでなく（日本にも黒鉄（くろがね）という言葉がある）、鉄鍛冶自身も黒かった。というのは、鉄鍛冶は高温の炉を使って、精錬、鍛造・鋳造にいたるまで一貫した生産をおこなっていたため、肌が黒く焼けたり煤（すす）にまみれたりすることが多かったからである。ロングフェローの鍛冶屋が黒いというのも、まずはこの事情が関係している。さらに鍛冶屋のこの容姿は、川本皓嗣がいうように高貴な未開人（ノウブル・サヴィッジ）を思わせるものだ。[11] インディアンを素材にしたロングフェローの『ハイアワサの歌』にも高貴な未開人のイメージが重ねあわされていたことも考えあわせていいだろう。

けれどももっといえば、村の鍛冶屋の姿は神話時代や伝説時代の人物像を思わせるものではないだろうか。たとえば聖書に登場する人物たちの姿を想起させるといっていい。この詩には時代設定がないことにも注意しよう。ロングフェローは、いつの頃かさだかでない神話的な時代の人物像に鍛冶屋の姿を擬すことによって、この詩に神話のようなおもむきを与えたかったのではないだろうか。

鍛冶屋の容姿について次に指摘しなければならないことは、その肉体に欠陥がないことだ。というのは、神話・伝説の鍛冶屋たちはみな異常な肉体をもっていたからである。たとえばギリシャ神話のヘパイストスは片足が不自由であった。ローマ神話のウルカヌスは片足が悪いだけでなく、醜悪な顔で知られている。鍛冶師ヴィーラントは逃げることができないようにと膝の腱を切られていた。ジークフリートのミーメは小人である。[12] ギリシャ神話の鍛冶師サイクロプスたち

11　川本、前掲書、249頁。

12　ワーグナー、前掲書、7頁、注2。

13　日本における鍛冶の神については、たとえば窪田蔵郎「鍛冶屋の神々」『金属』平成元年6月、34-37頁参照。

は隻眼であった。そういえば日本の鍛冶神、天目一箇神(あまのまひとつかみ)も独眼だ。[13]

肉体に異常がない場合でも、多くの鍛冶師は異常な格好をしていた。たとえば、エドマンド・スペンサーの『仙女王』(1590-1609)に登場する鍛冶屋は、顔が黒いだけでなく、目がくぼみ、頬が落ち、長いあいだ監獄にいたかのようだった。もちろん衣服もすりきれている。[14] 先にあげたスコットの『ケニルワースの城』に使われた鍛冶師ヴィーラントも、原始人のように熊の毛皮を身にまとい、同じ毛皮の帽子を目深にかぶっていた。[15]

ロングフェローの鍛冶屋はちがう。そこで形容されるのは、肉体のたくましさと、毎日の労働で変化した肌の色や髪の質である。健常者とことなる肉体の欠陥はない。異常な身なりも描かれていない。ここでも、神話・伝説の鍛冶師とロングフェローの鍛冶屋の対照が明らかだ。

第三行に進もう。額の汗は、もちろん聖書創世記3章19節の「汝は面(かほ)に汗して食物を食ひ」を受けている。しかし忘れてならないことは、聖書のこの一節の次に「終(つひ)に土に帰らん。其(そ)は其中(そのなか)より汝は取(とら)れたればなり。汝は塵なれば塵に皈(かへ)るべきなり」という有名な一節がつづくことだ。すなわち読者は、働く鍛冶屋の姿を味わいながらも、同時にその生活の無常観を予感するのである。ところで、ロングフェローのもっとも有名な詩のひとつである「人生の歌」でも、塵の一節が利用されていた。「村の鍛冶屋」を読むと「人生の歌」も思いだす仕掛けになっているのだ。詩人は「村の鍛冶屋」を最初「新しい人生の歌」と呼んだが、[16] 「人生の歌」と「村の鍛冶屋」はこのような具体的な接点があった。

第四行の「わずかでも稼げるものを稼ぐ」という部分は、やはり鍛冶師ヴィーラントの伝説を考えあわせるとその特徴が明らかになる。ヴィーラントはすべて王のために働かされていたが、村の鍛冶屋はわずかな稼ぎでも、それをすべて自分のものすることができるのである。そう考えれば、第五行の「まっすぐ世間の顔を見る」という部分も、ヴィーラントとまことに対照的だ。ヴィーラントは王に対する復讐に燃えながら仕事に精を出していた。密かに復讐の機をねらい、世間を正視できるような心理ではなかった。しかるに村の鍛冶屋には借金がないだけでなく、ヴィーラントのような復讐心も抱いていない。だから世間を正視できるのである。

最後の行は、聖書ロマ書13章8節の「汝等たがひに愛を負ふのほか何をも人に負ふな」を受けているのだろう。たしかにこの聖句の前半部分は詩に使われていない。しかしそのような言外の一節があるので、のちに明らかにされる鍛冶屋の愛情や家庭に関する記述にうまくつながるのである。

---

14 Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. Thomas P. Rocke, Jr. (New Haven: Yale University Press, 1981), p. 628.

15 Scott, *Kenilworth*, p. 134.

16 Quoted in Samuel Longfellow, *Life of Henry Wadsworth Longfellow* in *The Works of Henry Wadsworth Longfellow*, ed. Samuel Longfellow, vol. 12, p. 345.

よく働き

Week in, week out, from morn till night,	毎週、かかさず、朝から晩まで
You can hear his bellows blow;	ふいごの吹く音が聞こえる。
You can hear him swing his heavy sledge,	重い槌をふるう音は、
With measured beat and slow,	リズミカルでゆっくりと、
Like a sexton ringing the village bell,	寺男が鳴らす村の鐘のよう、
When the evening sun is low.	夕日が沈む頃に鳴る鐘のよう。

この連も素朴な単語と素朴な構文が使われている。20世紀の研究者や批評家たちが、ロングフェロー詩のこのような単純さに閉口したのもうなずかれよう。第一行に対句が二組ならべられ、とぎれることなく繰り返されるふいごの音やハンマーの音を想起させる効果があることは指摘するまでもないが、五行目の sexton 寺男については言及しておきたい。すなわち、寺男には、鐘を鳴らすことのほかに、墓堀という大きな仕事があり、この墓堀のイメージも次の伏線になっていることである。すでに指摘したように、「村の鍛冶屋」では、新しい場面・新しいモチーフへの移行が伏線によってなめらかになっていた。

ところで、ロングフェローは鐘の音をうたうことが好きな詩人であった。『ブルージュの鐘楼とその他の詩』(1846) のなかに、「カリヨン」と「ブルージュの鐘楼」という詩が収められている。前者では、詩とカリヨンの音の類似性がうたわれ、後者では、鐘の音によって幻想が広がり、中世の世界にひたる。ロングフェローにとって鐘は、詩および幻想と結びつくものだった。

なお、この連は音についてうたうことから始まり、その音が広い夕暮れの世界に広がっていく構造になっている。目に見えるはずのない音の広がりが描かれているようでおもしろい。なおガストン・バシュラールによれば、夕焼けが鍛冶屋の炉にたとえられることが多かったという。[17] この連の夕暮れも夕焼けだとすれば、鍛冶場の音がその夕焼けに広がることによって空全体が炉になった、と考えていいのかもしれない。

じつはこの連でもっとも興味深いのは、鍛冶屋のはたらく姿である。というのは、この連の鍛冶屋が詩人のようにも見えるからだ。その理由はふたつある。第一に、高橋康也もいうように、ふいごにはおしゃべりや言葉という比喩的な意味もあるので、風を送りだすふいごが言葉を作りだしているようにも見えるからである。[18] 第二に、大槌の音が、リズミカル(メシャード)というしばしば詩の韻律を形容する言葉で形容されているので、大槌のリズムが詩のリズムにも聞こえてくるからだ。このふた

17　ガストン・バシュラール著及川馥訳『大地と意志の夢想』思潮社、昭和47年、163頁。

18　高橋康也『ウロボロス』晶文社、昭和55年、154頁。

つの理由から、ふいごを使って火をおこし大槌をふるって鉄を鍛える鍛冶屋が、リズミカルな言葉を作りだしている詩人のようにも見えてくるのである。もちろんこのイメージはけっして全編にわたるものではない。[19] しかし少なくともこの連では無視できないイメージになっていて注目に値する。さらに付言すれば、このイメージは、ハンマーの音やふいごの音がこの詩全体の素朴なバラッド律（ミーター）のリズムをつかさどっていることとも無縁ではない。すなわち、詩人が詩の韻律をきざむように、鍛冶屋がハンマーやふいごでリズムをきざんでいるのである。

And children coming home from school	学校帰りの子供たちが
Look in at the open door;	あいた戸口からのぞきこむ。
They love to see the flaming forge,	炎をあげる炉をながめいり、
And hear the bellows roar,	吼えるふいごに耳を傾ける。
And catch the burning sparks that fly	飛び散る火の粉をつかまえる、
Like chaff from a threshing-floor.	脱穀場から飛び散る籾殻のような。

この連にいたって、鍛冶屋以外の村民たちが現れる。まずは村の子供たちであるが、子供といえば、孤島に幽閉された鍛冶師ヴィーラントが思いだされよう。王の息子ふたりが孤島の鍛冶場に訪ねてくると、ヴィーラントはふたりの命を奪い、その頭蓋骨を杯にしてしまった。さらに王の娘が来るや、暴行を加えて子を孕ませる。ヴィーラントは王に復讐するため、王の子供たちに仕打ちをしたのである。

一方、村の鍛冶屋はどうだろう。たしかに彼は子供たちに無関心だ。けれども学校帰りの子供たちをおのずと集めてしまうほどの尊敬を集めていたにちがいない。さらにいつも戸口が開いていたことに注意しよう。子供たちの見学を内心、歓迎していたようにも見える。ここでもヴィーラントと村の鍛冶屋の相違が明らかだ。村の鍛冶屋は村の一翼を支える鍛冶屋として、村人の生活に調和している。けっして敵対せず、孤立していない。まさに村人のひとりである。

三行目からは子供たちの眼前に繰り広げられる鍛冶場の様子が描かれている。燃えあがる炉が見える。ふいごの吠える音が聞こえる。そして火花が舞いあがる。たしかにこのあたりの描写は鍛冶場の風景としてごくふつうの景色かもしれない。けれどもきわめて特徴的なことは、鍛冶屋の姿が描かれていないことだ。描かれているものは、炉であり、ふいごであり、火花である。それらを操っている鍛冶屋の様子がうたわれていないのである。

その結果どのような効果が生まれたのであろうか。たとえば次のようにいえるだろう。子供たち

---

[19] 最終連にも詩人のイメージを見いだす研究者もいる。Matthew Gartner, "Becoming Longfellow: Work, Manhood, and Poetry," *American Literature* 72（2000）: pp. 79-82.

といっしょになって、火、ふいご、火花という、どの鍛冶場にもみられる物象に注意を向けていると、この鍛冶場が特定の鍛冶屋の作業場ではなく、いわば普遍化され、一般化された鍛冶場に見えてくるのではないだろうか。同時に連想も拡がる。その結果、ひとつの終着として、神話や伝説の世界の鍛冶場に連想がいたるのではないだろうか。

たとえば燃えあがる炉を見つめつづけると、子供たちのみならず読者は、怒った神はこのような炉を使って人間を溶かしてしまうのか、と思いだすだろう（エゼキエル書22章20-22節）。あるいは、偶像崇拝者ネブカデネザル王によって、平常より「七倍熱く」された炉に投げ込まれても、髪さえ焦がすことなく生還した敬虔なシャデラクたちの奇蹟を連想するかもしれない（ダニエル書３章19-27節）。さらに神が人間を精錬する「患難（なやみ）の炉」を思い起こすことだろう（イザヤ書48章10節）。

同様にふいごの音、ふいごの「吠（ロ）える（ア）」音を聞きつづければ、神が「獅子の吼（ロ）る（ア）ごとくに声を出し」、「悪人を剣に付」したことを考えあわせても不思議ではない（ホセア書11章10節、エレミヤ記25章30節）。火の粉もそうだ。飛びあがる火花を見れば、「火の子（ママ）の上に飛（とぶ）が」ごとく、人は「生れて艱難（なやみ）をうくる」ものである、というヨブ記５章７節を連想するだろう。火花がたとえられている籾殻についても連想はふくらむ。籾殻は「あしき人」（詩篇１篇４章）や「悪人」（ヨブ記21章18節）が吹き散らされるときのたとえに使われてきた。このように考えると、この鍛冶場は、怒った神が炉で人間を試金・精錬しながら、悪人を火の粉にして吹き飛ばしている鍛冶場のように見えてくるではないか。先には詩人の仕事場に見えた鍛冶場が、神の仕事場に見えてくるではないか。

ところで最後の脱穀場は、古来、公共の場として踊りや儀式がおこなわれてきた場所である。[20] じじつ聖書のなかでも、しばしば祭壇が設けられる場所になっていた（サムエル後書24章18-25節、歴代志略上21章18-28節）。したがって脱穀場は、教会の記述からはじまる次の連の伏線になっていて、場面の変転を円滑なものにしている。さりげないが、じつに入念だ。

歓喜し、悲しんで

He goes on Sunday to the church,	安息日には教会に出かけ、
And sits among his boys;	息子たちのあいだに席をとる。
He hears the parson pray and preach,	牧師の祈りと説教を聞き、
He hears his daughter's voice,	娘の声に耳を傾ける、
Singing in the village choir,	聖歌隊でうたう歌声に。
And it makes his heart rejoice.	歓喜にみちる心のなか。

20　De Vries, p. 465.

日曜日である。場面が変わった。いままで鍛冶という創造の仕事をしていた鍛冶屋が、ちょうど天地創造の神が「七日(なぬか)に安息(やすみ)」をえたように仕事を休む（創世記2章2節）。教会に行き、息子たちとともに座る。初めて家族が登場し、しだいに鍛冶屋の私生活に記述が及んでいく。

ここでゲルマンの伝説を思いだしてみよう。鍛冶師ヴィーラントが王の娘に孕ませた子供は、ディートリッヒ・フォン・ベルン伝説のなかでヴィテゲとして登場していた。ヴィテゲは父ヴィーラントがつくった名剣ミームングをうけつぎ、ディートリッヒのもとへ旅立つ。しかし父子は親子というよりもむしろ一個の鍛冶師と一個の若き勇士として描かれていて、もはや家庭という連帯が希薄である。まるで鍛冶師には家族が似つかわしくないようだ。[21] しかるに村の鍛冶屋では、家庭生活こそ描かれていないものの、信仰をとおした家族とのきずながうたわれていて、いわば家庭人の鍛冶屋になっている。村の鍛冶屋は大衆的英雄とはいえないが、アメリカでは大衆的英雄の多くが家庭人という特徴をそなえていたことも思いおこそう。[22]

この連は鍛冶屋が娘の歌声を聞いて喜びを感じるところでおわる。しかし聖書箴言14章13節には、「笑ふ時にも心に悲(かなしみ)あり、歓楽(よろこび)の終(はて)に憂(うれへ)あり」とあったことなどが想起されるだろう。つまり、心が喜ぶ裏には、あるいは、喜びの前後にはしばしば悲嘆があった。読者もいまだ語られていない憂愁が隠されていることを予感する。

It sounds to him like her mother's voice,	娘の声は妻の声を思わせる、
Singing in Paradise!	天国で歌う妻の声を。
He needs must think of her once more,	思いださずにはいられない、
How in the grave she lies;	墓場に眠る妻は安らかなるかと。
And with his hard, rough hand he wipes	かたい節くれだった手がぬぐうのは、
A tear out of his eyes.	両目から落ちるひとつぶの涙。

はたして鍛冶屋の最大の悲しみが紹介される。前連の心の喜びはやはりこの連に示される哀傷の伏線だった。鍛冶屋は娘の歌声から、墓に眠る亡き妻の声を思いだすのである。すでに指摘したように、墓は第三連に登場した寺男と結びついたイメージだ。

その妻は天国でうたっている。これもキリスト教文学でしばしば用いられてきたテーマだった。たとえば、アメリカのピューリタン詩人エドワード・テイラーの詩「正しく精励した教会員の喜び」にも使われていて、天国へ向かう教会員たちの姿が、「キリストの馬車では、みんな楽しくうたう

---

21 テッツナー『ゲルマン神話』下巻、352-54頁。

22 亀井俊介『アメリカン・ヒーロー』ジャルパックセンター、昭和59年、50頁。

23 Edward Taylor, "The Joy of Church Fellowship Rightly Attended," in *The Poems of Edward Taylor*, ed. Donald E. Stanford (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989), pp. 334-35.

のだ、栄光に向かって進みながら」というリフレインによって描かれていた。[23]

最後の二行はたしかにセンチメンタルである。しかし頑丈で荒れた手と涙という取りあわせはあざやかで印象的だ。この部分はイザヤ書25章8節の影響を受けているのであろうか。そこでは神がすべての死を飲みこみ、人々の顔から涙を拭ってくれた。もしそうだとしたら、鍛冶屋は涙を拭くことによって悲しみを乗り越えることになる。

Toiling, — rejoicing, — sorrowing,	よく働き、歓喜し、悲しんで、
Onward through life he goes;	人生の道を前へと進んでゆく。
Each morning sees some task begin,	毎朝、新しい仕事を始め、
Each evening sees it close	毎夕、最後までしあげる。
Something attempted, something done,	仕事を始め、仕事をおえ、
Has earned a night's repose.	一夜の休息を手に入れる。

この連からは具体的な場面の描写がなくなり、詩全体がまとめられていく。すでに一行目が、これまで描かれてきた鍛冶屋の生活の凝縮になっている。最初の「よく働き」は、第一連から第四連に掛けて描かれてきた鍛冶屋の姿だ。「歓喜し」は第五連にその例が挙げられ、「悲しんで」は次の第六連に紹介されていた。

すでに指摘したように、キリスト教でも喜びと悲しみは、いわば「あざなえる縄のごとし」のように考えられていた。たとえば、ヨハネ伝16章20, 22節では、憂いが喜悦に変わったし、イエスの有名な山上の説教（マタイ伝5-7章）を受けたルカ伝6章21節には、「幸福(さいわい)なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん」となっていた。鍛冶屋の生活も喜びと悲しみが背中あわせになった生活である。

夜の休息については、ヨブ記のヨブと対比すると面白い。ヨブの場合、「患難(なやみ)の日」を送っていて、ひどく骨が痛み、夜になってもその病苦がつづき苦痛である。体が休まらないのだ（30章16節）。村の鍛冶屋にも苦難はある。しかし彼は、「労苦によりて得るところの福禄(さいわい)」に満足するコヘレトのように、労苦とその成果によって得る夜の休息に満足している（伝道之書5章18節）。

Thanks, thanks to thee, my worthy friend,	ありがとう、わが尊き友よ、
For the lesson thou hast taught!	教訓を教えてくれて。
Thus at the flaming forge of life	燃えあがる人生の炉のなかで
Our fortunes must be wrought;	自分の禍福は鍛えるもの。
Thus on its sounding anvil shaped	よくひびく金床で
Each burning deed and thought.	行動と考えは形作るもの。

最後の連になって、詩の教訓がまとめられる。これは説話から道徳詩にいたるまでよく見られた形式だ。現代から見てその道徳臭を笑うことは簡単だが、ロングフェローは躊躇することなく教訓を添えた。まずは語り手に鍛冶屋を二人称で呼ばせることによって、詩全体を読者の身近に引きよせる。

さらに鍛冶の縁語である flaming forge と wrought に、life と fortunes を重ね、鍛冶という仕事を隠喩にして、そこから大きな意味を引きだした。しかも f の音を連ねて、耳にも心地よい。fortunes は、この詩の内容からすれば、幸運だけでなく、運命、あるいは人生そのものを指すと考えるほうがいいだろう。苦悩も含めた人生の苦楽を表していると思われる。幸も不幸も自分の人生は自分で切り開かなければならないのだ。もしかしたら紀元前 5 世紀のローマの政治家アッピウス・クラウディウスの言葉「人間はだれも、自分の運勢の鍛冶屋である」を受けているのかもしれない。

つづく三行から六行まで、対句が組みあわされて利用され、最後は鉄床の音を再び響かせてしめくくられた。詩全体を支えてきたそのリズミカルな音が、余韻としても残るような仕掛けになっている。

多い仕事、少ない知恵

ここまで西洋の伝説や神話と照らしあわせながら「村の鍛冶屋」を読みなおしてみたが、取りあげる機会のなかったもうひとつの鍛冶屋像を紹介したい。それは旧約外典のなかの鍛冶屋像である。

旧約外典のなかにベン・シラの智慧（シラ書）と呼ばれる巻がある。旧約外典のなかで最大の書で、処世の心得が集められたものだ。この38章に職人たちと学者とを対比させた部分があった。「学者の智慧は閑暇(ひま)ある機(おり)に来(きた)」るのだから、「業務(つとめ)」の多い職人たちは「智慧」を得ることができないとされ、その忙しい職人たちの様子として、農夫、牛追い、彫印師、陶器職人などとならんで、鍛冶屋の様子が描かれている。

この鍛冶屋の記述はきわめて具体的だ。鍛冶屋は「鉄砧(かなしき)の側(そば)に坐して」、「火の蒸気はその肉体を疲らせ」る。「炉の熱気」にあてられながら「槌の音(ね)は常にその耳に」ある。「その心は業(わざ)の成るを待ち、全くこれをなしとぐるまで醒め居(を)るなり。」しかし「業務」に追われる職人たちには限界があるという。すなわち「集会(つどひ)」でも高い地位にはのぼれない。裁判官にもなれず、法律も理解しない。「義」を説くこともできず、「喩言(たとへ)」にも精通していない。[24]

ただし職人たちが完全に否定されているかといえば、必ずしもそうではない。職人たちは「いづれも皆己(おの)が手の業(わざ)に巧み」で、「此等の人々なくば、町には住む人なく、留(とどま)るものも、往来(ゆきき)するものもなかるべし」ともいっているからである。だが全体的に見れば、職人たちの美点を認めながらも、対照的な「学者」、すなわち「至高者(いとたかきもの)の律法(おきて)を思ひめぐらす者」を賞揚していることは

[24] 外典の引用は、旧約聖書続篇翻訳委員編『旧約聖書続篇』（聖公会出版社、昭和 9 年）による。この翻訳は、（大正改訳）文語訳聖書の文体に「準拠し、なるべくこれに近からんことを期したり」という（1 頁）。

明らかだ。

このような鍛冶屋のイメージ、すなわち、体が頑丈で腕もたつが、精神性が低く、指導者たりえない、というイメージがじつは鍛冶屋をしばしば表象したイメージだったのではないだろうか。たとえば、ナサニエル・ホーソーンの小説（ロマンス）『ブライズデイル・ロマンス』（1852）の登場人物ホリングズワースも鍛冶屋であったが、どこか旧約外典の鍛冶屋を思わせる人物であった。ホリングズワースは実験的共同体ブライズデイルの中心人物のひとりで、刑務所改革運動に燃える博愛主義者という設定であるが、語り手カヴァーデイルによれば、「顔色が浅黒く、顎髭が豊か」な男である。「体格はがっしりしていて、筋骨たくましい。」けれども「外面的上品さや、単なる礼儀作法」を「熊ほどにも備えていない。」しかも、そのような様子は「彼の本来の仕事（鍛冶）にふさわしい」というのだ。同様に教授ウェスターヴェルトもホリングズワースについて「頑丈で、毛深く、顔はいかめしく、しかも不器量」な男で、「高度の知的訓練を積んでいない様子」だといっている。[25] 旧約外典やホーソーンの鍛冶屋と村の鍛冶屋との相違が明らかだ。おもしろいことに、旧友であったロングフェローとホーソーンとがかくも対照的に鍛冶屋を描いたのである。

もう一度、「村の鍛冶屋」の教会の場面を思いだしてみよう。鍛冶屋は息子とともに牧師の祈りと説教を聞くが、牧師というのは、旧約外典のいう「義」を説き、「喩言（たとへ）」に精通している人物である。もちろん鍛冶屋は牧師になれず、牧師の話を聞く立場にすぎない。ロングフェローもそれがわかっている。けれども詩人は、鍛冶屋が教会で牧師や聖歌隊に耳を傾け、家族のことを思いながら人生の哀楽を味わっていることに美点を見いだしているようだ。つまり鍛冶屋がクリスチャンであって、市民・社会人であることに価値を認めているようだ。

そういえばクリスチャンの鍛冶屋というのもそもそも珍しいのかもしれない。ゲルマンや北欧の神話の多くはキリスト教伝来以前の伝説であるから、鍛冶屋がクリスチャンでないのは当然だとしても、キリスト教の聖書に登場する鍛冶屋も異教徒が多かった。たとえばイザヤ書44章12節では、「偶像をつくる者」、すなわち異教の偶像制作者として「鉄匠（かなだくみ）」があげられている。そのような「鉄匠」は「つよき腕」をもっているが、目と心がふさがれていて知識も英知もないとされていた。

なお、旧約外典が「村の鍛冶屋」の材源のひとつであるという証拠はない。旧約外典はプロテスタントに正典と認められていなかったのだから、そのテクストに接する機会も少なかったと思われる。しかしヨーロッパ文化、とくにカトリック文化に精通していたロングフェローは外典をよく読んでいた。じじつブルース・メツガーによれば、ロングフェローは旧約外典をもっとも利用したアメリカ作家のひとりだった。[26] たとえばロングフェローの『ジューダス・マカビーアス（ユダス・マカバイアス）』（1872）は旧約外典のマカビー第二書にもとづいて書かれた劇詩で、豚肉を食べよ

25　Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*（New York: W. W. Norton, 1978）, pp. 18, 62.

26　Bruce M. Metzger, *An Introduction to the Apocrypha*（New York: Oxford University Press, 1957）, p. 10.

という王の命令を拒んで処刑された七人兄弟とその母親の物語の部分では、外典に描かれていない母親の内面までも描出していて成功している。このように旧約外典に詳しかったロングフェローであるから、ベン・シラの智慧のなかの鍛冶屋像も知っていた可能性が高いと考えるべきであろう。

おわりに

以上のように読みなおすと、村の鍛冶屋の特徴が明らかになる。

まず、村の鍛冶屋が自主独立した人間であることだ。隷属しない自由な身分である。ただし人目を避けて生活しているのでもないし、孤高の名人でもない。すなわち独立しながらも、社会人として村のなかで自分の職能を発揮している。しかも家庭をもち、家族を愛している家庭人でもある。

第二の特徴は、これまで何度もいわれてきているように、彼が勤勉であることだ。自分の天職に心と力を傾け、その労働によって自分の独立を維持している。そして一夜の休息が得られる生活に満足し、けっして営利主義に走らない。

最後の特徴は、村の鍛冶屋が敬虔なキリスト教徒であることだ。異教の神を信じるのでもなく、偶像崇拝者でもない。聖職者になれるような知識は持ちあわせていないが、篤い信仰心をもっている。苦しいときには神に祈り、喜ぶときには神に感謝する。聖書の教えるとおり、人生が苦楽からなることを知っている。

この三つが鍛冶屋の大きな特徴といえるだろう。とすると、この鍛冶屋がまさにアメリカ人に見えてくるではないか。アメリカを代表する理念のうち、平等こそうたわれていないが、それでも、自由、独立、友愛、勤労、信仰というアメリカの理念を兼ね備えた、代表的なアメリカ人の姿に見えてくる。鍛冶屋の村がどこにあるのか詩のなかで言及されていないが、それはアメリカこそふさわしい。

もちろん、アメリカでは職人に対して特別の敬意が払われてきた。たとえばベンジャミン・フランクリンの「アメリカへ移住しようとする人々への情報」(1784) を思いおこそう。それによれば、アメリカでは「有用な技術」が歓迎され、「必要かつ有用な職人に対するたえまない需要」があった。その結果、「職人はヨーロッパの職人よりもいい生活を送り」、その「技能によって尊敬を受けて」いた。[27] このようにアメリカでは職人が尊重され、その有用な技術が高く評価されてきたのである。

けれどもロングフェローは、単にアメリカの職人に価値を認めるだけでなく、鍛冶屋という職人をしてアメリカ人を代表させたといえるのではないだろうか。というのは、ヨーロッパの鍛冶屋とはちがうアメリカの鍛冶屋をえがくことによって、ヨーロッパ人とはちがうアメリカ人の特徴をえ

---

[27] Benjamin Franklin, "Those Who Would Remove to America," in *Writings*, ed. J.A.Leo Lemay (New York: Literary Classics of the United States, 1987), pp. 977-79.

がいているからである。すなわち、ロングフェローの鍛冶屋は、単なるアメリカの一職人ではなく、アメリカ人そのもの、アメリカ人の原型になっているといえそうだ。鍛冶屋の姿をかりてはいるが、アメリカ人の普遍的な理念を象徴し、アメリカ人に共通する原体験を体現しているといえそうだ。言いかえれば、アメリカの鍛冶屋を描くことによって、ロングフェローはユングのいう「集団的無意識」を表現したのである。その意味で「村の鍛冶屋」は詩人が作ったアメリカの神話と呼んでいいだろう。

たしかに「村の鍛冶屋」には、多くの神話に見られる超人性がない。アメリカの大衆的英雄である木こりのポール・バニヤンは巨人であった。鉄道建設の英雄ジョン・ヘンリーも超人的な力を発揮してトンネルを掘った。しかるに、村の鍛冶屋は平凡な一市民である。錬金術を操ったり、聖剣を鍛えあげたりするわけでもない。文字どおり一介の職人だ。また、多くの神話に見られる叙事詩的な背景も「村の鍛冶屋」にはない。「ポール・リヴィーアの疾駆」(1861) のなかでロングフェローもうたったポール・リヴィーアはアメリカ独立戦争の英雄であった。しかるに村の鍛冶屋にはそのようなアメリカ史にまつわる栄光がないのである。このように考えると、「村の鍛冶屋」はたしかに英雄神話や叙事神話とは呼べないようだ。けれども、その世俗的、現世的なところが、じつにアメリカらしい神話といえまいか。その非超人的、非英雄的なところが、じつに民主主義的な神話といえまいか。

村の鍛冶屋に欠けているものといえば、ディケンズの『大いなる遺産』(1861) に登場する鍛冶屋のジョーやその徒弟ピップが抱えていたような複雑な苦悩が見られないこともあげられる。ピップは自分の「荒れた手」を資産家の養女に笑われ、紳士階級にあこがれた。ジョーは、金持ちになったピップとロンドンで再会するとき、田舎者の無粋をさらして恥ずかしい思いをする。[28] それに比べ、村の鍛冶屋には社会意識がまったくない。単純素朴である。『大いなる遺産』より20年以上前の作品であり、リアリズムから遠い作品であるとはいえ、「村の鍛冶屋」の無邪気な理想主義は指摘しておかなければならない。[29]

けれども、アメリカの市民社会やアメリカ人の市民生活にもとづいたアメリカ人の神話を作りだしたことが、この詩の最大の特徴であることを忘れてはならない。ロングフェローは『ハイアワサの歌』で17-18世紀のインディアンの英雄をうたい、『エヴァンジェリン』で18世紀のフレンチ・アンド・インディアン戦争の悲話をかたった。そして「ポール・リヴィーアの疾駆」では1755年の独立戦争開戦をうたった。「村の鍛冶屋」は、のちにこれらの神話的叙事詩を書くことによっていわば神話創成者になるロングフェローの出発点になったのではないだろうか。

したがって、冒頭に紹介したキートンもそうであったように、「村の鍛冶屋」に描かれた勤勉の

28　Charles Dickens, *Great Expectations* (London: Penguin Books, 1994), pp. 44, 57, 207.

29　See Newton Arvin, *Longfellow: His Life and Work* (Boston: Little, Brown and Company, 1963), p. 68; and Eric L. Haralson, "Mars in Petticoats: Longfellow and Sentimental Masculinity," *Nineteenth-Century Literature* 51 (1996) : pp. 327-55.

美徳だけに注目することは、この詩の本質を見あやまっていることになる。たしかにこの詩には刻苦勉励の美徳と質実剛健な職人の姿もうたわれている。しかしそれはこの詩の一部にすぎない。この詩全体は、詩人の考えたアメリカ人の原初的な姿、アメリカ人の生活の原型が描かれていると考えるべきであって、勤勉はその特徴のひとつである。「村の鍛冶屋」を奮励努力の詩とのみ解することは、この詩を矮小化することにほかならない。